

語法・辞書の研究

八木克正

はじめに

本欄を担当するようになって、毎年8月中旬から、とりあげるべき著書や論文、辞典の調査を始める。目の届く範囲の外に優れた論文や著書を見過ごしているかもしれないという危惧は常にある。次に、選定した著作を順次読み返ししながら簡潔にまとめるという作業を9月末までに進める。この作業は私自身の勉強の時間であり、一番楽しい時間でもある。なじみの分野もあるし、未知の分野もある。だが、どの分野でも、具体的な言語現象を扱っている限り、理解できないことはない。そして、まとめて読むという効果もあって、著作に対する(主観的な)評価基準が否応なくできてくる。

第一に、提示方法(presentation)である。優れた論文は例外なく、何が問題点で、何を明らかにしたかが極めて明確である。特に、新しい概念を提示する場合、どう書けば理解されやすいかを考えた議論の流れが巧みな論文が多い。

第二に、データ検証である。前回も述べたが、語法研究や辞書編纂においては、言語事実が何よりも大切である。ある表現方法が容認されるか、されないのかは、理論を組み立てる上で極めて重要である。あらゆる手段(生のデータ、文献、インフォーマントなど)を使って確認するという姿勢が明確な論文が目立つ。

第三に、先行研究探索の範囲である。言語理論の立場に立った研究は、問題の性質上、海外の文献にたよることが多い。だが、日本にも英語の文法・語法研究の長い伝統と歴史がある。言語理論の枠組みを超えた先行研究の検証があればより優れた研究になるだろうと思うことが少なくない。

第四に、用例の日本語訳である。コーパスから得た用例の意味解釈は難しい。理論言語学が盛んなころの、簡単な単文を使う時代とは異なる難しさがここにある。

1. 論 文

1.1 『英語語法文法研究 第21号』(英語語法文法学会(編)、開拓社、2014.12)

今回は、シンポジウムの論文3編、論文2編、書評論文1編と、数から言えば近年になく寂しい状況であった。

第21回大会シンポジウム「名詞句とその修飾をめぐる」の講師による論文は、中澤和夫「限定修飾について」、河野継代「最上級と共起する関係節について」、佐々木一隆「名詞の前位修飾について」の3編である。

中澤論文のタイトルは「名詞前位位置の構造体と後続する名詞との関係について」の意味で、一口に名詞の前位修飾といってもさまざまなタイプがあることを出発点に、二つの要素の関係を、理論的に考えられる6つのタイプのうち存在しない2つのタイプを除く4つのタイプに分け、その統語的・意味的・音韻的特徴を詳述したものである。タイプ分けに「強限定修飾」(a red flower), 「弱限定修飾」(an in-depth analysis), 「非修飾」(a quick cup of coffee)の3種類を導入したのが中澤論文の特徴である。

河野論文は、最上級と共起する関係節には少なくとも2種類あるとする。通常の制限的關係節と最上級の關係節である。これら2つのタイプは異なる特徴をもつ。最上級の關係節がもつ特徴(關係詞はthatやゼロ形が普通、述語動詞がよく完了形になる、など)は、最上級-er, mostの要求する範囲の指定をする關係節であると考えたとすべて合理的に説明ができる、という趣旨である。最上級と共起する通常の制限的關係節がどのような、最上級の關係節とは違った特徴を持つのか知りたいところである。

佐々木論文では、英語は日本語・中国語と異なり、名詞の前位修飾、關係詞節による後位修飾(制限と非制限)など多様な修飾が可能であると論じる。そして、これらの「通常の修飾」から、a stroke and resulting partial loss of languageのような、名詞修飾語が等位接続された「周辺的な修飾」への広がり論じている。周辺的な修飾はディスコースの流れの中で解釈されるべきものであるという。不定冠詞のaが後続部分全体にかかるとする[a [[stroke] and [resulting partial loss of language]]]という分析は再考の余地がある。

論文は次の2編である。

並木翔太郎「移動の着点として解釈されるIn句について」。Mary walked in the room. は①部屋の中を歩いた[場所]、②歩いて部屋に入った[着点]、の2つの解釈が可能だが、Mary danced in the ballroom. は着点の意味にはならない。その理由は何か。また、walkのようにinもintoも着点の意味を表す場合に、inとintoではどのように意味が異なるのか。意味の合成性という観点からの説明の試みである。

明日誠一「「クジラの公式」の修辭的解釈を導出するメカニズム——主節の命題否定と属性否定の2つの読みを巡って」。A whale is no more a fish than a horse is. のno... more thanには、①「主節の命題否定の読み」と、②「属性否定の読み」があることを主張する。①の読みでは、2つの命題を強く否定する。これが一般的に理解されている読みである。②の読みでは、He is no more a doctor than I am. を例にとると、「彼が医者であることは否定せず、彼は医者資格がないという属性を否定している」という。

書評論文は、中澤和夫「關係節の機能と構造をめぐって——河野継代著『英語の關係節』の書評」である。書評の対象は、第14回学会賞受賞作である。英語の制限的關係詞節に関する諸事実を網羅し、実証的研究の基盤を提供したこと、これらの事実の

包括的で妥当な分析を提案したこと、無批判に受け入れられていたことから問い直す射程の広い方法論をとっていることを指摘している。

1.2 JASEC BULLETIN (日本英語コミュニケーション学会, 第23巻第1号, 2014.12)
本欄に関係する論文は次の2編である。

水本孝二「否定辞と共に起する already に関する語用論的考察」。学校文法では, already は通常肯定文で用い, 疑問文, 否定文では yet を用いるとされる。また, 疑問文や否定文(しばしば付加疑問を伴う)で使われる場合は, 意外さや驚きを表す, とされる。しかしこれは一般化としては不十分であり, not already にはすでにことが行われているはずだという予見があるとすべきで, この違いは, not...yet と not already の文における not の否定作用域の違いに求められるという。

藏菌和也「連鎖動詞 come to と get to の意味と統語に関する研究」。コロケーションの観点と動詞の意味アスペクトの観点から, come to と get to の統語的・意味的相違を論じている。選択制限の調査から, come to は「プロセス」を表す動詞と結合しやすく, get to は「完結性」をもった状態・動作を表す動詞と結合しやすいという。

研究ノートは次の1編である。

井上亜依「文法からの逸脱——メタ言語的使用の musts, shoulds, oughts」。どの法助動詞が名詞用法をもち, どのような機能を発達させているかについて, コーパスを使った数量的な調査をもとに考察を加え, 法助動詞の根源的モダリティの機能が名詞形として使われると主張する。

2. 論文集

深田智・西田光一・田村敏広(編)『言語研究の視座』(開拓社, 2015.3)

実証的な立場からの論文が数多く収録されている。

中右実「非人称 it 主語と特異な構文」は, 非人称 it の実態を構文レベルで精査分析している。it was Time and 構文(it was 2 o'clock in the morning and...), 伝聞情報の say that 構文(They say that he is going to resign./ it is said that...), it says LOC that 構文(it says in the newspaper that...), 日本語の無主語構文などがその構文例である。

福安勝則「A Paper the Length of an Office Memo—「記述の対格」の記述をめぐる」は, その標題でわかるように, 名詞句の後にきた the...of...が前の名詞句と同格になる構文の分析である。この構文を size で代表させて, 「the size of 構文」と呼んでいる。この構文は名詞句を構成し, 主語, 動詞の目的語, 前置詞の目的語, 補語の位置に生じる。不定名詞句の場合が「圧倒的に多い」という。

堀内裕晃「身体部位名詞句の意味機能について」は, 身体部位を使った表現, 例えば John raised a fist hand.[不定冠詞]/ John raised the fist hand.[定冠詞]/ John

raised his fisted hand.[所有代名詞]の、限定詞の違いによる意味の違い・指示力の違いを、発話者が身体部位所有者に対する感情を抱いているか、客観的に描写しているかという点から説明をしている。

大橋秀夫「可動性のパラメータ——日英語の借用動詞の仕組みをめぐって」は、英語の borrow と日本語の「借りる」についての従来の定説とされる説明の不備を指摘し、日英語の意味的、語用論的食い違いを認知言語学的に説明したものである。

廣瀬幸生「叙述型比較と領域型比較——比較構文の日英語対照研究」は、「日本の人口は韓国より多い」という日本語に対応する英語は、*The population of Japan is larger than Korea.だと不可で、The population of Japan is larger than that of Korea.とすべきであるが、それはなぜか、という問いに答える論考である。日本語は「叙述型比較」と「領域型比較」の両方を許すのに対し、英語は「叙述型比較」しか許さないことに起因する、という。

大室剛志「動名詞から分詞への変化：動詞 spend の補部再考」は、He won't have a hard time getting in. の getting は動名詞とするか分詞とするかで意見が分かれる。著者はこれを「半動名詞」と呼ぶ。動名詞とする説は in の削除変形か、小節分析をもとにするが、これらはいずれも正しくない。そこで、「動的文法モデル」をもとに、in の削除により新たに分詞の -ing の資格を獲得する、という説明をする。

大竹芳夫「知りたい情報の同定と判明を披瀝する英語の構文——It is that 節構文と It turns out that 節構文の比較対照」は、表題の2つの構文が、聞き手には容易に知ることのできない情報を言語化する手段であり、これらの意味特性と発話条件を明らかにする試みである。it is that 節構文は話し手の知識と関連付けて先行情報の論理的解釈や事の実情・真相を同定し、発話の冒頭には現れない。it turns out that 節構文は調査などの検証を経て事の内実や新事実が判明したことを披瀝し、発話の冒頭に表れうる、とする。

関茂樹「空所化現象再考」は、文法書では「まれ」とされる「歴史的不定詞」(e.g., The car drew up and the two men got out, Martin to depart for . . . , Wexford to see Stevens . . .)をはじめ、これまで注目されることのなかった多様な空所化の現象を、小説から得た資料をもとに論じている。

和田尚明「英語の単純現在形の分析再び」は、単純現在形の多様な用法(状態的現在、習慣的現在、総称的現在、瞬間的現在、未来構文、従属節における未来時指示、歴史的現在、指示発令二者択一、now と共起する近未来指示用法、ト書き、メモなど)を独自の時制理論を使って統一的に説明する。多様な単純現在形はすべて同じ時制構造をもつが、それぞれ異なる時間構造をもつために異なる意味解釈がされるという。

早瀬尚子「懸垂分詞を元にした談話機能化について——granted の意味機能変化」

は、もとは懸垂分詞として譲歩の意味で使われていた *granted* が、等位接続的な用法や、*granted* の後にコンマがきて、独立した副詞になる用法、*granted* に後続するはずの節の後に生じるなど、多様な用法を発達させていることを論じている。

大村光弘「(I'm) afraid の文法化とその動機づけ」は、I'm afraid が ① *that* の省略が可能であること、② 文中・文末で使用可能なこと、③ 文照応 (I'm afraid so) が可能なことでは思考動詞 *think* と共通するが、④ 否定辞繰り上げができない点が異なる。この特徴は、I'm afraid の文法化の過程で生じる意味的・機能的変化の帰結であるとする。④ の理由の説明づけは興味深い。

3. 単著書

3.1 山岡洋『新英文法概説』(開拓社, 2014.5)

全体が二部にわかれ、Part I 文の構造(文型、語句の結び付き、文の種類)、Part II 品詞(主部の類、叙述の類、準品詞)からなる。「主部の類」の下位区分は、名詞、代名詞類、その他の主部になることができる要素、となる。「叙述の類」の下位区分は、動詞類、修飾詞類、連結詞、となる。準品詞の下位区分は、準動詞(不定詞、分詞、動名詞)、関係詞、となる。このように、今までの文法書とはかなり違った構成になっている。文型についての詳細な考察と決定詞(determiner)を「名詞を伴う代名詞類」としているのが特徴的である。

3.2 中野清治『英語聖書の修辞法と慣用句』(英宝社, 2014.7)

I 成句・イディオム、II 聖書の修辞法、III 誤用・誤解の諸相、IV 引喩法の効果の4章からなる聖書英語の文献学的研究である。I は聖書由来の成句・イディオムの出典探索である。II は豊かな聖書の修辞法を紹介する。直喩、隱喩、引喩、換喩、提喩などは現代の言語学でも研究対象だが、それ以外にもさまざまな修辞法があることを述べている。III では、旧約聖書はヘブライ語、新約聖書はギリシャ語が原典だから、英語訳にはさまざまなバージョンがある。原典からの英語訳、さらには日本語訳にもいろいろな問題点があることがわかる。IV は文学作品やスピーチなどの聖句の引用の例があげられている。

3.3 大名力『英語の文字・綴り・発音のしくみ』(研究社, 2014.10)

本書の内容は以下の通り。I 「五十音図」について考える——調音音声学入門、II 発音と綴り字——基礎編、III 発音と綴り字——応用編、IV 分綴法、V 文字の種類・発達・用法、VI アルファベットの起源と発達、VII 英語における正書法の発達と音変化。英語の綴りと発音の不一致はだれしも認識するところだが、英語の綴りの難しさが何に由来するのかを、基礎から説き起こす。

3.4 保坂道雄『文法化する英語』(開拓社 言語・文化選書 47, 2014.10)

本書は、冠詞、*there*、所有格 *'s*、接続詞、関係代名詞、再帰代名詞、助動詞 *DO*、

法助動詞、不定詞、進行形、完了形、受動態、itの13の文法現象をとりあげ、動的に変化する英語の姿を描き出したものである。英語の今の姿は歴史的産物である。there構文を例にとると、もとは場所の副詞のthereが変化したものである。そのthereが新情報導入の役割をする虚辞になる過程を生成文法の構造分析法を使って、再分析という考え方によって説明している。言語変化も生成文法の構造分析によって理論づけができるとする。

3.5 衣笠忠司『英語学習者のための Google・英辞郎検索術』（開拓社 言語・文化選書 48, 2014.10）

衣笠忠司『Google 検索による英語語法学習・研究法』（開拓社 言語・文化選書 21, 2010.10）の続編である。Googleは動詞としても使われる（e.g., Did you google it?）ほどインターネット検索に便利なツールである。これを使って英語の学習に役立てるといふ。これは、パソコンでインターネットを使う人ならばだれでも挑戦できる方法である。だが、効果的な利用には、検索の「技」がある。書名の通り、研究者向けというよりは、多様な言語表現を見付けるための学習者に有用な「技」の数々が述べられている。

3.6 中野清治『英語の法助動詞』（開拓社 言語・文化選書 49, 2014.10）

法助動詞（dare, need, will, shall, can, may, must, would, could, should, might）と擬似法助動詞（ought to, be going to, have to, had better, used to, be able to）の意味・用法をひとつひとつ検討している。法助動詞の包括的な概説書として便利である。周知のように、ほとんどの法助動詞は、主語志向の根源的用法と命題志向の認識様態的用法をもつ。この2分法が、日本では、大正4年の齋藤秀三郎の『熟語本位英和中辞典』の中で「第1の意味」「第2の意味」として行われていることに触れ、その慧眼を賛じている（p. 5）。

3.7 久野暉・高見健一『謎解きの英文法——使役』（くろしお出版, 2014.10）

シリーズの第7作目である。問題意識と解決の手法は、極めて語法研究的であり、英和辞典の記述の不備や誤り、データの誤認の指摘など、興味ある記述は語法研究者や辞書編纂者には刺激になるだろう。そしてまた、おそらく英和辞典の make, cause, persuade, let などの使役動詞の今後の記述に少なからぬ影響を与えるだろう。また、コラム欄の3件の記述も面白く読める。I have a temperature. が容認可能かどうか、本書の記述と英和辞典の記述を比較して確かめておくことは有益である。言語学的な研究成果を言語事実との照合なしに辞書記述に取り込むことは昔からのやり方であるが、要注意であることも学べる。

3.8 石田プリシラ『言語学から見た日本語と英語の慣用句』（開拓社 言語・文化選書 51, 2015.3）

筆者はカナダ生まれで、日本では比較的少ないフレイジオロジー研究者のひとりで

回顧と展望

ある。流暢な日本語（書き言葉のみならず、話し言葉も）には舌を巻くが、日本語母語話者がそれと気付かず使っている多くの慣用句の分析の手法と論理的整理を見ると、日本での英語慣用句研究はもっと理論的整備が必要であることに思い至る。慣用句と一般連語を区別し、慣用句は次の3つの性質をもつものと言う：一般連語と比べて、(1) 構成語が固定していること、(2) 文法的制約が強いこと、(3) 句を構成する個々の語の意味の積み重ねと一致しないこと。この性質の特徴づけは、広くどの言語でも基準になるだろう。この手法は、日本の国語辞典の編纂者の慣用句収集と分析にきつと役立つと思う。

4. 辞 書

4.1 *Longman Dictionary of Contemporary English*, 6th ed. (Pearson Education, 2014)

評価の高い5大学習英々辞典のひとつLDOCEの5年ぶりの改訂第6版である。学習英々辞典も一時期のような改訂ラッシュが終わって、安定期に入った。この中で出す改訂版にはやはり特別な理由があるはずである。第5版で重要語に加えられたCOLLOCATIONとREGISTERのセクションに加え、GRAMMARのセクションが加えられた。今は、紙ベースとDVD-ROMに加え、インターネットを使って利用できる。

4.2 八木克正(監修)『小学館オックスフォード英語コロケーション辞典』(小学館, 2015.2)

Oxford Collocations Dictionary, 2nd ed. (2009) から項目を厳選して日本語に翻訳したものである。原書は20億語からなるOxford English Corpusを使用して作られ、英和辞典やその他のネット上に公開されている英和辞典でも日本語に訳されていない複合名詞やイディオム、コロケーションなどがリストされている。原書にはない「サインポスト」を付けている。これは、修飾語などを類型化して検索しやすくしたもので、例えばstoreの前位修飾語には「大小」「形態・専門」を意味するものが来るというようなグループ分けがなされている。
(関西学院大学名誉教授)